

反省のための具体的な方法に言語化がある。もし、知恵というものが、言葉では表せないものであるならば、そもそも言語化という言葉で表す方法によって、知恵をつかむことができるのか。こういう疑問が出てくる。

言語化というものは、あたかも井戸水をくみ上げる行為に似ている。井戸水をくみ上げていくときを想像してみる。そのとき、井戸水の表層水が言葉で表せる知識である。井戸水の深層水が言葉では表せない知恵であるとする。このとき、言語化によってくみ上げることができるのは、表層水だけである。だが、表層水をくみ上げていくと、自然に深層水が井戸の表層近くに昇ってくる。それは、言葉で表せない知恵というものが、意識によって、つかまれやすくなっている状態を意味している。すなわち、このとき、スキルやセンスをつかみやすくなり、直観や洞察が閃きやすくなる。

長時間の会議で徹底的な議論をしても答えが出ないときがある。万策尽きたとの思いの中で、これ以上考えても仕方がないと諦め、気分転換に食事に行ったりすることがある。そうしたとき、不思議なことに、突然、直観が閃き、答えに結びつくアイデアが生まれるときがある。こうした経験をもっている人は、決して少なくはないのではなかろうか。

科学哲学者のヴィトゲンシュタインが、『論理哲学論考』という著書の中で述べている。

我々は、言葉にて語り得るものを語り尽くしたとき、言葉にて語り得ぬものを知ることがあるだろう。

すなわち、徹底的な言語化に基づく反省という方法は、言葉で表せない知恵を、その深みにおいてそのまま体得する方法でもある。反省という行為は、明確な方法をもったものである。

「二度とあのような失敗はしたくない」「すべての責任は私にある」いずれも、反省ではない。後悔や懺悔である。後悔の心境では、失敗の原因を冷静に分析できない。そのため、将来の失敗を避けることはできない。また、懺悔の心境には、周りの人に対して懺悔を行うことで、自分がこれ以上責められることを避けたいという心境が見え隠れする。この心境では、自分が何を直すべきかを考えることはできない。

後悔や懺悔では、成長していくことはできない。成長していくためには、反省という行為こそが大切である。後悔は、過去に向かったの営みである。それに対して、反省は、未来に向かったの営みである。また、懺悔は、他者に対しての営みである。一方、反省は、自己に対しての営みである。本当に成長していきたいと思うのであれば、未来を見つめ、自己を見つめる姿勢こそが求められる。